

# 第二次世界大戦をめぐるハワイ日本人移民の 忠誠心と日本人意識

— 短歌・俳句・川柳を史料として —

島田法子

はじめに

この小論は、ハワイの日本人移民一世の短歌・俳句・川柳を素材として、彼らの日本人意識、祖国への忠誠と移住地アメリカへの同化に焦点をあわせて、その変化を追うものである。取り上げる期間は、1931年の満州事変から、日中戦争、太平洋戦争、敗戦を経て、1952年のサンフランシスコ講和条約発効に至るまでの、波乱に満ちた約20年間である。この間、一世の法的地位も、社会的立場も大変動を経た。戦前は列強としての祖国日本に誇り高かった一世は、日米開戦とともに「敵性外国人」という烙印を押され、日本人としての誇りや文化を抑圧される中で、アメリカへの恭順を表明し、息子をアメリカ軍に送り出し、文化的同化を受け入れた。敗戦に打ちひしがれた一世であったが、1952年マッカラン・ウォールター移民法成立によって念願の帰化権を付与され、アメリカに帰化していった。しかし戦中でも、さらに敗戦後でも、一世の祖国への想いは姿を変えつつも維持され、彼らが日本文化や価値観を保持し続けたことが見えてくる。一世移民は、日本とアメリカに対する複属性を戦前、戦中、戦後と、形をかえて保持し続けるのである。

筆者はここ数年ハワイにおける移民と戦争というテーマを追い、2004年には『戦争と移民の社会史——ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争』を上梓した。その中で、戦争は一世にアメリカ化を迫り、日本の伝統的な制度、

習慣、価値観を捨てるように抑圧したが、そのような外的圧力による同化は表面のみに終わり、戦争終結とともに日本文化のリバイバルが起きたことを論証した。しかし日米戦争のはざまに置かれた日本人移民が真珠湾奇襲をどのように受け止め、彼らがどのような戦争体験をしたか、その実像を探り出す作業は、一世が残した資料の欠落のゆえに簡単ではないことも記した<sup>1</sup>。その後、筆者は、社会・文化史の史料として、一世の文芸作品に着目するようになり、短歌・俳句・川柳が一世の思考や行動、感情を反映する重要な史料となり得ることを理解するようになった。戦争中も一世は短歌や俳句に日々の感慨を綴り続け、作品は戦後になって日の目をみるようになった。ここで取り上げるのは短歌結社「潮音詩社」の歌集『ラウハラ』、総合文芸雑誌『鑽』第2号、個人の歌集5冊、個人の俳句集3冊、川柳句集2冊、そして邦字新聞『ハワイトタイムズ』の1946年1月から8月の文芸欄である。個人の歌集は、岩谷残花、竹井蘇人、相賀安太郎、中林無有そして山里慈海のもの、個人の句集は横山松青、古屋翠溪そして川本恵子のものである<sup>2</sup>。彼らはいずれもハワイに数十年定住し、日本人移民文学の中心的存在であった。この中の5人は戦時中アメリカ本土の強制収容所に抑留され、戦後ハワイに戻った。

## I. 開戦前の一世社会

戦前の一世はハワイ永住を決めていたが、アメリカに帰化する法的権利がなく、何十年とハワイに暮らしていても国籍は日本人であった。1931年の満州事変勃発後、日本の大陸侵略を歓迎して、一世のあいだでは祖国に対する愛国心が高揚し、日本文化への強い傾斜がみられた。例えば、1933年の日本語学校教員による教育会代議員会で、佐藤太一理事長が「日本語学校においては、単に文字を教えるのみでなく、日本精神文化の美徳」を授けて欲しいと挨拶した。1933年以降、一世が誇りをもって子供を日本に留学させることが一種の時代風潮となった。日本語学校も1935年にピークを迎え、学齢期の二世の大多数42,665人の生徒が186校で学んでいた<sup>3</sup>。

ところが1937年日中戦争が始まり、1939年日独伊三国同盟が成立すると、日米関係が緊張して日系人の忠誠心が疑われるようになり、日本人社会はそれに対応せざるを得ない状況になった。この頃から日本語学校では星条旗の掲揚と、ワシントンやリンカンの肖像画を掲げることが始まった。日本人社会は、日本への強い帰属意識と、敵対的なハワイ主流社会の世論への配慮という、矛盾する二重性のなかにおかれていた。

多くの日本人一世は日本の大陸侵略のニュースに感激し、「皇国日本」を誇りに思った。邦字新聞には日本軍の勝利の記事が踊った。そして戦況を知りたくて移民たちは短波ラジオにかじりつき、日本からのニュースに夜の更けるのを忘れた。当時の一世代の読んだ短歌・俳句が彼らの思いを伝えている。

- 戦況のラジオに秋の夜は更けぬ 横山松青
- 皇軍に感謝の雑煮供へけり 横山松青
- 六十のおきな戦に出るとききわが雄心は勃々ともゆ 岩谷残花

楽園ハワイの一世たちは、大陸の日本人兵士を思いやった。そして移民たちはこぞって祖国に献金や慰問袋を送った。貧しくて意のままにならないことも多かったが。

- 満州の雪の広野に剣をとりて戦ふ人ぞ尊しと思ふ 岩谷残花
- 皇軍に献金せんと胸算をひそかにせしがこの月も足らず 岩谷残花
- 慰問袋鳳梨入れたく思ひけり 横山松青

またこの時期、祖国日本への訪問団や、祖国に留学する学生たちも増えた。1938年、1939年には留学中の二世は約2,000人に上ったし、家族とともに日本に引き上げた「帰日二世」もほぼ同数に達した<sup>4</sup>。そして祖国訪問の余裕のないものは、感慨深く船を見送った。

- 戦没の勇士の霊を慰むとゆく人のあり今日の船には 岩谷残花

日米関係がさらに緊迫化して、1940年に日米通商条約が破棄されると、日本人移民は不安を覚えた。そして同年末までには、ハワイの人々は日米戦争が避けられないかもしれないと考えるようになった。

- 春雷す日本は遂に無条約（通商条約廃棄） 横山松青
- 夏追うて宣戦の電波乱れ飛ぶ 横山松青

ハワイでは対日戦争準備が着々と進められていったが、特に日系人人口がハワイの総人口の37.2パーセントを占め、その4分の1が日本国籍の一世であったから、日系人対策がハワイ防衛にとって重要な関心事となった。ハワイ主流社会は、「アロハ精神」と呼ばれる伝統的な人種協調を堅持して、日系人が他のエスニック・グループと対立し孤立しないように、多様な民族の団結を図ろうと準備を始めた。軍もその方針に同意し、日本人に対して、もし法を守ってアメリカの利益に反することをしなければ、たとえ日米戦争が起きても公平に扱われるだろうと保障した。

一世社会もその方針に従って非常時に備える準備を行った。たとえば日系人連合協会は、1941年11月8日から12月5日にかけて、連続講演会を開催した。講演では、「非常時に処して大局を誤らず、在留民未曾有の試練に耐へ、苦痛困難を克服して二世三世永久の安泰を図る在留民の心構へと、是を実施に具体化する各種の民間防衛協力方法に就き真摯熱烈なる講話忠言」をした<sup>5</sup>。この連続講演会が終了した2日後に、日米開戦の運命の日を迎えたのである。

危機が迫っていることを察し、中にはハワイで得た資産をまとめ、日本に帰国する移民たちもいた。しかしほとんどの一世の場合、すでにハワイに定住して数十年、子どもはアメリカ市民であって息子はアメリカ軍に徴兵されており、ハワイに骨を埋める気持ちに変わりはなかった。本音では

あくまでも日本の勝利を願いつつも、外面はアメリカへの恭順を示し、事態の進行を見守る以外になかった。世界に戦禍が広がっていることを知ってはいたが、人種協調のハワイの風土の中で平穏に日々を送ることができた。

- 鬼と化して皇軍に利せん島の秋 横山松青
- 浪風にゆだねてやすし島の冬(日米国交悪化の巷にたちて) 横山松青
- 子等の擬戦うららか英語日本語 横山松青
- 南京は陥ちると聞けどわが心あやしきまでに静もりて居り 相賀溪芳

## II. 戦争中の一世社会

### 1. 一世社会の真珠湾奇襲への反応

1941年12月7日早朝、日本海軍が真珠湾を奇襲した。翼に日の丸をつけた大編隊が青空に現れて急降下し、真珠湾に停泊していた米海軍艦隊を襲い、戦艦が次々と黒煙を上げて燃えあがった。ハワイの人々は、各方面で日米開戦を予期しての準備をしてはいたものの、真珠湾奇襲を予想していたわけではなかった。その日は日曜日で、のんびりした朝を楽しんでいた人々は、何が起こったか理解できなかった。

一世はどのように開戦を受けとめたのであろうか。英語で書かれた記録はハワイ大学の研究者や軍関係者によって残されているのに対して、敵国人となった一世が日本語で残した記録はほとんど残っていない。しかし、戦後になって発表された当時の短歌や俳句には、一部の個人の記録ではあるが、正直な感情が吐露されている。限界はあるものの、真珠湾奇襲後の一世の行動や思考、感情——どのような衝撃を受け、困惑したか——は、確かにその中に見て取れるといえよう。日本人移民にとって、日本軍がこんなにも多くの日系人が居住するハワイを奇襲するとは、全く青天の霹靂、

想像の外であった。この衝撃をどのように受けとめたらいいかとまどうばかりだった。

- 起こるべからざる事の起こりて日の国と星の国との戦ひ始まる 相賀溪芳
- 日本攻撃真珠湾の放送にやがて吾等は愕然としぬ 中林無有
- 来るものは遂に来たりぬ極月七日（日本の荒鷲部隊真珠湾空爆） 横山松青

真珠湾奇襲はあまりに予期できない出来事だったので、ハワイの人々は、米軍の演習だろうと思ったほどであった。奇襲を知らせるラジオのアナウンサーは「本物の攻撃！ 本物！ 本物！」と叫んでいた。一世の心中には、日本海軍の奇襲成功を愉快に思う気持ちもかすかにひそんでいたようだ。

- 楽園襲ふ荒鷲強く羽ばたけり 横山松青
- 飛行機に日の丸さへも描きてする烈しき演習よとも云ふ人 中林無有

開戦のその日に、ハワイ準州は軍政下に置かれた。ただちに灯火管制、夜間外出禁止令が発せられた。12月7日の奇襲の夜、徹底した灯火管制がしかれた闇のハワイは美しい月夜であった。この運命の日、灯火管制下の闇の中で、ハワイに在住した16万人の日系人はこれからどうなるのかと、ただ途方にくれて脅えて一夜を明かしたに違いない。そしてブラックリストに載っていた一世指導者たちが検挙されて収容所に抑留された（抑留されたのは日系人人口の1パーセント以下であった）。

- ブラックアウトに挑むか冬の月皓々 横山松青
- 眠り得ぬ冬の夜長し消燈下 横山松青

- 捕はれてゆく夫門に見送れば青燈の車闇に消えゆく 志賀野浦子

軍政がしかれたため、行政権と司法権が陸軍下におかれ、酒類販売禁止、民間法廷停止、全ての学校の一時閉鎖、食糧品販売一時停止、ガソリン配給制など、ハワイの人々の生活を左右する命令が矢継ぎ早に発せられた。軍が住民に対してこのように厳しい取扱いをした主要な目的は、日系人を統制することであった<sup>6</sup>。スパイ行為の危険から、一世のカメラとラジオの所持が禁じられた。治安維持のために人身保護令停止が命じられ、信書は検閲され、電話は盗聴された。公的な場での日本語の使用と、日本人の10人以上に集会が禁止となった。日本国籍の一世は、敵性外国人と位置付けられた。一世は小さくなって暮らすことになった。

- <sup>エネミーエイリアン</sup>敵性外国人とふ其称呼よ夢の中にも吾にのしかかる 中林無有
- 敵国人と知るか冬の蚊迫り来る 横山松青

予想されたように日系人コミュニティは混乱し、特に一世は恐怖におののき、困惑し、日本人移民社会は不安定になった。そこで軍政政府は、一世を安心させて士気を高めるために二世を動員し、少なくとも基本的な部分で他の人々と変わらない生活を保証した。差別されることなくすべての住民に予防注射が施され、毒ガスマスクも平等に配給された。外出時にはマスクの携帯が義務づけられた。

- ギヤスマスクカメラに代へて春の町 横山松青

アメリカの最前線ハワイにいる一世には、戦艦の動きや砲車の動きから、戦況が肌に伝わってきた。また、1944年になると日本が追い詰められていくことを察知した一世もいた。

- 島を出入る艦あわただし冬の雷 横山松青
- 街を砲車あとからあとから、日本が追ひつめられてゆく 古川文詩朗

この戦争は、一世をアメリカ化する絶好の機会と捉えられた。日本人一世は、下駄や足袋を捨てるように、洋服を着て、洋式の料理を作り、箸のかわりにナイフとフォークを使うように、さらに日本語で書かれたあらゆる看板や標識を取り去るよう仕向けられた。柔道や剣道、相撲を止めさせ、あらゆる日本の祭り——ひな祭り、花祭り、端午の節句、七夕祭り、盆踊り等々——が中止された。そしてもっとも注目されたのが「スピーク・アメリカン」(Speak American) 運動の展開である。「アメリカ語を話せ」とは「英語を話せ」ということと同時に「アメリカ化せよ」という意味を含んでいた。日本語を話すことは汚辱となった。

アメリカ化計画の一環として、日本人組織や団体の解体が図られた。その主要なターゲットになったのは日本語学校、仏教寺院、神道神社であった。教育法人として憲法によって保護されていた日本語学校も、信教の自由を憲法で保証されていた寺院や神社も、「反アメリカ的」組織であるとして閉鎖するだけでなく、解体するように圧力をかけられた。

しかし一世の日本人としての意識や大和民族の誇りが容易に変わるはずもなかった。1942年、開戦後最初の正月を迎え、一世はそれまでと変わりになく日本人として元旦を祝った。

- 一億の民の火玉か初光り (千九百四十二年戒厳令下に新年を迎ふ)  
横山松青
- 門松や問はでもあるじ日本人 横山松青

軍によって強制立退きを命じられ接収された寺は数カ所であった。これらの寺は戦後返還された。接収されたのではなく、戦中米軍に倉庫や事務



所として使用された寺院もあった<sup>7</sup>。例えば、カウアイ島のカパア本願寺は、「施設は合衆国陸軍の士官の本部として使用された」が接収されたのではなく、軍からの使用料は支払われたものと推察できる。しかし軍が使用した寺は一様に荒れたようで、仏具や仏像がなくなる等の損害を被った<sup>8</sup>。

- 兵営と化す御陀堂や互返る 横山松青

しかし、戦争が終結する前でさえ、日本軍のハワイ攻撃の危険性が遠のくと、日系人をアメリカ化しようとする圧力が弱くなった。1944年10月24日に軍政が終わりを告げると、文民政府は軍政政府が発したさまざまな命令を撤回し、公的な場での日本語の使用も、敵性外国人(一世)の集会も解禁となった。仏教寺院では日曜礼拝や日曜学校が復活した<sup>9</sup>。

神道に関しては、全ての神社が日本の国家神道と関連しているように誤解され、政治的な危険要素と見なされ、信教の自由の恩恵をうけるに値しない団体であると見なされた。開戦時47社あった神社のなかには財産を没収された布哇出雲大社や布哇大神宮の他、自主的に解散したものが相当あり、また神職者を収容所に奪われた神社は自然活動停止となった。戦後、法廷闘争を経て、ハワイの神社は「国家神道」ではなく「教派神道」であることが認められ、信教の自由が保証され、また神社の没収財産は返還された。神道の信者のほとんどは一世であり、彼らに堂々と初詣ができる喜びが戻った。

- 国家神社の誤解晴れたり初詣 横山松青
- 神を誤解す人の愚詫びて初詣 横山松青

## 2. 一世社会と二世兵士

第二次世界大戦と日系二世といえは、多くの戦死傷者をだして「最も多くの勲章を受けた部隊」として合衆国陸軍戦史上に名を残した第442連隊

戦闘部隊はあまりにも有名である。彼らの輝かしい戦功・犠牲によって、それまで日系人にかけていた猜疑、すなわち日系人の忠誠心は信用できないという不信感は一掃されたといわれる。息子を軍隊に送り出すことによって、一世はアメリカへの恭順を示した。しかし、二世兵士の心情を思いやる一世、また兵士の親たちの悩みは深かった。

- 島民一體米人なるよおらが春（忠誠） 岡本蕉葉
- 生みの親と育ての親の争ひに二世は迷ふ荆踏む道 相賀溪芳
- 割り切れぬ千々の悩みに踏み迷ふ二世の親の心淋しも 相賀溪芳
- 敵とならん子の入営を微笑みつ 横山松青

ハワイでは戦前に4回の徴兵があり、開戦時に2千人程度の二世が陸軍の二個歩兵連隊に編入されていた<sup>10</sup>。彼らは真珠湾奇襲時には、正規の陸軍兵としてハワイ防衛の任務についたにもかかわらず、1ヶ月後には排除され始める。1942年1月5日、二世男子の徴兵資格が1-Aから4-C（徴兵不可外国人）に変更され、彼らの一部は武器を取り上げられ、労働隊に編成された。このようなワシントンからの指令に反発したハワイの総司令官エモンズ将軍は、むしろ二世兵士だけの部隊を編成して彼らを本土に移動させることを勧告し、それが認められた。5月、まだ残っていた正規の二世陸軍兵士1,432人は他と分離され、白人士官9名とともに「ハワイ緊急大隊」という特別組織に投入され、1942年6月5日、誰にも見送られることなく密かにアメリカ本土に向けてホノルルを出港した。彼らは Wisconsin州マッコイ基地で「第100大隊」と名前を変え、9月に北アフリカのアルジェに上陸。その後イタリア各地を転戦した。激戦のカッシノでは、200人の兵士が出撃し、生きて帰ってきたのはたった23人であった。最終的に第100大隊だけで1,703の名誉戦傷章（パープルハート、紫心章）を受け、第100大隊は「パープルハート大隊」と呼ばれるにいたった。ハワイの親は毎夜無事を祈念する。

- カシノ戦記念の紫心章へ泣き 斧平
- 欧州の戦野をめぐる愛子に恙(つつが)なかれと夜毎念ずる 泉さだを

日系人兵士補給のため、ハワイでは、1943年1月28日、エモンズ将軍が1,500名の志願兵の募集を発表すると、9,507名というあまりにも多くの二世が応募したので、募集枠がまず1,725名に拡大され、次いで2,600名に拡大され、最終的に2,686名が採用された。ハワイ二世の志願兵は、イオラニ宮殿において結成式を挙げ、盛大な見送りを受けて、訓練のために大陸に送り出され、1944年6月にイタリアに上陸して第100大隊と合流した。彼らは日系二世だけの第442戦闘部隊に編成され、ハワイの俗語「ゴー・フォー・ブローク」(Go for Broke、あたって砕けろ)をスローガンに、勇猛果敢な戦闘を繰りひろげた。

- 紫心章光る日焼の兵續く 村上紅嵐

1943年秋頃から、ハワイの日本人社会では、戦死した二世の葬儀が相次いだ。時には1日に数回の葬儀が行われることもあった。戦死者は、ホノルル市内のパンチボールの丘にある国立墓地に埋葬された。

- その小さき十字架毎に一人一人戦に死にし人の子埋まる 中林無有
- 盆丘の国立墓地に詣でくれば一目に胸を打つ眺めかも 中林無有

1944年に二世の徴兵が復活した。第442戦闘部隊の日系人兵士総数は18,000人に達し、戦死者は680人、行方不明は67人、戦傷者は9,486人であった。結果的に第442戦闘部隊は、戦傷者に与えられる名誉戦傷章など、陸軍戦史上「最も多くの勲章を受けた部隊」となった。彼らの戦功は一世にとっても誇りであった。

- 朝寒や子の徴召の遂ひに來し 芳庭
- 二世輝く門出やレイの菊薫る（インダクチイ） 岡本蕉葉
- 日系兵士のいさをし永久に七四祭 横山松青

### III. 戦後の一世社会

#### 1. 祖国敗戦と一世の悲しみ

1945年8月14日、ホノルルは華やかな対日戦勝パレードで町中が沸き立っていた。ハワイ諸島は日本軍による真珠湾奇襲以来要塞と化し、生活の全てが戦争に巻き込まれてきたため、人々は戦争終結の喜びと解放感に浮かっていた。しかしその影で、約3万5千人の日本人一世の多くが、祖国日本の降伏というニュースに途方にくれ、家に閉じこもり、祝勝どころか悲しみにうちひしがれていた。何も食べることも眠ることもできず、涙にくれる者も多かった<sup>1)</sup>。

一世の場合には、アメリカに対して敵対的ではなかったものの、心のうちに日本最良の感情がぬきがたくあった。一世の多くは、戦前はハワイの日本語新聞やラジオ放送で日本からのプロパガンダに接し、戦中は密かに日本からの短波ラジオ放送に耳を傾けていた。彼らは日本の天皇は神聖であり、天皇の軍隊は無敵で、八紘一宇は高尚な戦争目的であると信じ、敵国のハワイにしながら日本の勝利を確信していた。それゆえあの日、賑やかな対日戦勝パレードの影で、多くの日本人一世が悲嘆にくれていたのも自然のなりゆきであった。戦勝をつけて鳴り響くサイレンが、一世にとっては敗戦のサイレンであった。

- 終戦のサイレン鳴り止まない空へ出ては見る 河童十九子
- 戸外には停戦サイレンが鳴りており我は涙の心もてきく 福永漢月

サイレンはアメリカ本土の収容所でも鳴り渡った。ハワイでは西海岸とは異なり、日系人の一斉強制収容はなかったが、一部の一世指導者たちは速

捕されて本土の収容所に監禁された。

- サイレンは鳴りつぎやまず男の兒の熱き血潮を凍らして鳴る 竹井蘇人
- この汽笛吾が皇國のとむらひの響きならずや胸にひゞかふ 竹井蘇人

特に収容所で抑留された一世指導者にとって、敗戦を冷静に受け止めることは困難なことであった。

- シャボン玉日本兵は玉碎す 横山松青
- わくわくと慄く胸はしづまらず居つ立ちつ只うつろ心に 竹井蘇人
- 頼みてしわが日の本の敗れしに心も魂も置き所なし 中林無有
- あはれこの譬えがたなき無念さよ泣かむとすれど涙湧き来ず 中林無有

ハワイの日本人はラジオ短波放送で、終戦を告げる天皇の声に接した。そして、天皇の人間宣言を受け止めることになった。受けた衝撃は日本にいる日本人と変わらなかった。

- 気も狂ふ思いあの日の御玉音 すみれ
- ラヂオへ顔せよ合ひ敗けたといふ故國からの一語一語 古川文詩朗
- 畏しこさよ人間也の御言葉 砂兆

終戦から3箇月が経ち、大陸の収容所から解放されたハワイの日本人指導者たちが島に帰還し始めた。荒野や砂漠地帯の収容所から、光溢れる花のハワイに戻った一世たちの感慨も、また夫の帰還を待った妻たちの感慨も、一入であった。

- 外の垣にも花の我家でご飯いたゞく 古谷翠溪
- かゝる身となりて仰ぎしホノルルの街の明るさは目にしみるかも 竹井蘇人
- 過ぎし日の思出ふかしとらはれの夫まちにし四年あまりの 志賀野浦子

そして迎えた戦後最初の新年に際して、家族と囲む食卓に平和の味をかみしめた。1月16日の『ハワイタイムズ』には、収容所から帰還した一人のインタニー（被収容者）の正月を祝う句が掲載された。

- 忍従の四年も夢や今朝の春 重兼花雪
- 妻と子と共に頂く雑煮かな 重兼花雪
- たゞうれし妻が料理の雑煮なる 重兼花雪

と同時に、敗戦国日本は主権を失い、ホノルルの日本領事館は閉鎖されたままであり、領事館の壁の御紋章の跡が敗戦を物語っていた。

- 御紋章の跡仰ぎけりお元日（元領事館の庭に佇みて） 横山松青

戦後の日本の惨状は、まず進駐軍として日本へ渡った二世兵士からの手紙で伝えられた。ララ（Licensed Agencies for Relief in Asia, LARA）のドキュメンタリー映画も焦土日本の惨状を伝えてきた。

- 腹えぐる母国ニユースに昼も夜もさいなまれ居り夏深みつゝ 三陽夕陽丘
- 映画とも思へざりけりまざまざと戦災日本の現実のさま（ララ映画を観て） 泉白水
- 桜花咲いて焦土の人心慰めをりと甥の音づれ 中林無有

緊急の救済が必要であり、県人会や教会等を通じて食糧、衣料品、野菜の種、漁業用品、医薬品等が集められ、ララを通じて祖国に届けられた。また日本との郵便が再開されると、日本の親族友人への無数の救援小包が送られた。

- 居残って幸知る今日も慰問品 向洋
- はらからに送る小包ととのへつ悲しき戦ひに心濁るも 山里慈海
- 小包に籠る誠や風薫る 比嘉静観

日本との信書の交換が自由になり、久しぶりに日本からの懐かしい便りが届くようになった。家族中が日本からの手紙に引き寄せられた。中には思いがけない訃報もあった。

- 五年ぶり故郷の便りへ寄る眼と眼 快夢起
- ひらかなの便り祖國へ向いて讀み 晴耕
- なれぬ手の母のつたなき横文字がほゝえましくもわが心うつ 村田草夫
- 久方の古里のたよりはかなしくも母みまかりししらせなりけり 泉さだを

そして故国からの便りには日本の惨状がつぶさに書かれていた。なかでも、広島出身の移民が多かったハワイでは、親戚縁者を犠牲にした原爆のしらせが、彼らの胸を押しつぶした。

- 久々の便りも悲しまざまざと祖国のすがた見るこちして 能見成(女)
- この悩みうすらぐひまもあらせじと日本便りは今日も書きつぐ 三陽夕陽丘

- 原爆の祖國は凍る星の夜 潮風
- 原爆のニュース次々春寒し 川本恵子

日本降伏後まもなく、日本敗戦を受け入れられない一世たちの中で、日本が戦争に勝ったという様々なデマが一世社会に飛びかった。日本が勝ったことを証明するさまざまな「証拠」が捏造された。一世社会に流布したデマは、やがて「勝った組」と呼ばれる多くの団体を生み、ある種の社会運動となった。日本敗戦の情報がもたらしたショックの大きさを物語っている。現実を回避する勝った組の一世たちに、多くの日本人は同情した。

- この無念まぎらさんとて無意識に流す勝利と思ひやるべし 中林無有
- まことなれかしと思へど好ましき噂の影はたよりなげなる 中林無有
- 珈琲採るあの一家勝った党だといふ 横山松青

一時、勝った組運動は一世社会を風靡したが、徐々に弱まっていった。大多数の一世は祖国の復興の響きをも耳にして、祖国への新たな誇りを抱くようになった。優秀な大和民族ならば、きっと立派に復興するにちがいなかった。

- 他に劣る国民ならじ今十歳経なば築かむ輝きの国 竹井蘇人
- 國は今再建の途のつくべかり微けく光りさしてあらずや 竹井蘇人
- 舊き人去り新しき人の立つ故國思へば胸おどるかも 比嘉静観
- 復興へ八千万の汗と意気 蒼蛇樓
- 復興を急げと初日笑ひかけ 海面子

アメリカ軍の支配下に、民主日本への転換が図られていることに、多くの



一世は期待したが、変わりゆく日本を喜べない一世もいた。

- デモクラシー産声あげた新日本 潮風
- 感激はさしておこらじ民主的新日本と人は説くとも 中林無有

## 2. 新しい人種関係

二世兵士たちは、戦後ハワイ社会に大きく進出した。彼らは社会的、経済的にも主流社会に食い込みはじめた。また多くの二世退役兵が GI ビル (Servicemen's Readjustment Act of 1944) の恩恵を受けて、イェール、コロンビア、シカゴ、ノースウェスタン、イリノイ、ミネソタ等の名門大学や大学院に進学し、ハワイに戻って大学教員、弁護士、裁判官等になった。また多くはハワイ大学を卒業し、ハワイのビジネス界で成功した<sup>12</sup>。

二世兵士は、ヨーロッパから金髪青い目の花嫁をつれてハワイに帰還し、一世を驚愕させた。

- 凱旋のみやげ金髪紫心章 斧鷹
- ロンドン娘日系兵を追ふてくる 一涙
- 連れて来た嫁は爪紅眼の青く 銀水

戦争によって二世女性たちの社交生活や結婚に大きな変化がみられた。戦前、日本人社会では性や結婚に関する締め付けが強く、日系人は他のエスニック・グループと比較すると、日系人以外の人と結婚するいわゆる外婚率が極端に低かった。ある統計によると、1920年代の外婚率は男性2.7パーセント、女性3.1パーセントで、1930年代には男性4.3パーセント、女性6.3パーセントであった。ところが一世の権威が奪われた戦中は、自由な恋愛が進み、外婚率は戦中戦後を含む1940年代には男性が4.3パーセントに留まっていたのに対して、女性は一気に16.9パーセントに跳ね上がった<sup>13</sup>。

- 人種など言っておられぬ時代相 友郎
- 樂園は白黄黒の血が混り はげ頭
- あきらめて青い目の孫抱きあるき 正美

妻子あるアメリカ兵との恋愛から、多くの私生児がうまれた。また親の了承なしに結婚する「自由婚」が若者の間でひろまり、戦前はニュースにさえなつた離婚がごく当たり前のことになった。一世の嘆きの声が聞こえてくる。

- 碧い目のベビを産せて雲隠れ 加里比
- 新聞で知つたわが子の自由婚 銀水
- 離婚がニュースとならぬ世の變り 吞州

### 3. 戦後の日本文化のリバイバル

戦争終結後は、日本人社会ではエスニック文化、組織、活動が一気に復活した。戦後のハワイ社会はエスニック文化に対して非常に寛容で、「非アメリカ的」という激しい攻撃を受けることもなくなった。日本人社会の内部では、日系人組織・団体を再建することにむけて、強い社会的力学が働いていた。重要な制度であった日本語学校、仏教寺院、神道神社の再建は、自然ななりゆきであった。生活習慣や行事等にも、日本文化が復活した。

戦後の日本人社会は、戦争中に蓄財がすすみ、好景気であった。軍部を相手に大儲けしたレストラン業者や養豚業者等は、戦争中は使い道がなかつた余剰金を、戦後派手に消費に向けた。大きなダイヤモンドの指輪が光つていたり、結婚式や出征祝いに多額の金が使われたりした。

- 五年目の友は成金 A クラス 一涙
- マリ・リングその昔なら家が建ち 柳子

しかし一世は、物質的には豊かで、精神的には寛容なハワイに住めることに感謝しつつ、祖国日本の親族たちにすまない気持ちを抱いた。特に一世の胸に去来したのは祖国の食糧難であった。

- 故国を偲び吾身を思ひ元日のもの喰べております 河童更涼
- 日本には済まぬと思ふ台所 瓢泉
- 箸把れば偲ぶ故國の米不足 人入
- 古郷へすまない感謝ターキデナ 向洋

文化的抑圧から解放された日本人社会ではひな祭りが復活し、隠してあった雛人形が何年かぶりに取り出された。また俳句同好の仲間の結社も復活し、句会が毎月開かれるようになった。戦争中閉鎖されていた劇場が再開され、没収をおそれて隠されていた日本の時代劇映画のフィルムが、戦後まもなく上映されるようになり、劇場は満員の大盛況であった。

- 久さびさに雛なつかしく飾りけり 川本恵子
- なつかしき人の集ひや初句會 豊村
- 四年ぶり日本映画や初興行 恵子

日本文化のリバイバルと並行して、ハワイ社会に寛容に受け入れられた日本人は、多民族社会ハワイへの同化に向かっていった。

- 伝統を捨てて二世に親生まれ 曲水
- うろ覚え孫に合せて米国歌 日出子
- 洋装が身につかぬまま妻は老ひ 銀草子

1952年のマッカラン・ウォールター移民法によって一世にも帰化の道がひらかれると、日本国籍を保持するか、アメリカ国籍を取得するかを選択

に直面することになった。

- 親と子の悩みも籍のありどころ 君子
- 帰化が是か帰化せぬが否か弥生尽 横山松青

帰化申請を決意した一世は、高齢の身で英語や、アメリカ憲法、アメリカ史の試験勉強を始めた。それまで日本人であることを声高に誇っていた一世も試験勉強の仲間入りした。祖国に後ろ髪をひかれる思いを抱えつつ、また周囲から冷やかされつつ。

- 子の国に埋ると決めた帰化願 仁逸
- 待ってゐる母に濟まない帰化願 浪江
- 六十にして明日なき春の帰化講座 横山松青
- 帰化権をめざす ABC 冷かされ 灯花

帰化によって得られた最大の収穫は選挙権の行使であった。かつては人生の大半をハワイで過ごしたにもかかわらず、投票日には疎外されていた一世であった。最初の選挙に参加したとき、一世は感激に手が震えた。

- 一世は碁でも打たうの選挙の日 法寸
- 淋しさは選挙の出来ぬ日本人 所一
- 帰化市民初の一票へ手がふるえ 風影
- 選挙日や帰化に輝く一票を 横山松青

同じ 1952 年、サンフランシスコ講和条約が発効し、日本が主権を回復した。ハワイの一世は日の丸を見上げて感慨にふけた。

- 十一年たえて久しき日章のみ旗かがやくけさの蒼空 中林無有

- あらたなる日の丸仰ぐ異国の地 灯女

1952年は一世にとって節目の年であった。一方で彼らはアメリカ市民権を獲得し、他方で日本の独立を祝った。一世にとっての戦後が終わった年であったといえよう。そして一世は国籍がアメリカ人になっても日本の伝統や文化を積極的に保持し続け、アメリカと日本の両方に所属する複属性を保ち続けた。

- 日本人としての名残や雑煮餅（帰化を許されて） 横山松青
- 永住もしかと決まった杵の音 睦子
- 故里へアメリカ人で帰朝する 美影女
- 独立日本の鐘が鳴る鳴る初御空 川本恵子

## 終りに

太平洋戦争は移民に同化をせまり、戦争を契機としてアメリカ化が進んだといわれることがあるが、短歌、俳句、川柳に表現されている一世は、法的地位が戦前の日本人移民、戦中の敵性外国人、そして戦後帰化権が認められてからは帰化市民と変わっていったが、その日本人意識は形を変えて彼らのうちに保持されていることがわかった。

戦前帰化不能とされた一世は、アメリカ国籍の二世の親としてハワイに永住する覚悟を決め、多民族共存社会のハワイで、祖国とハワイの両方につながる複属性を享受することができた。開戦とともに敵性外国人となった一世は、息子をアメリカ軍に送り出し、同化の圧力に屈してアメリカへの恭順を示したが、心中は日本人として祖国の勝利を確信し、矛盾した複属性を保った。そして戦後になると、再び寛容なアロハ精神に基づくハワイ社会で、日本文化のリバイバルを起こした。さらに帰化権が与えられるや、多くの一世は日本国籍を捨てたが、日本人としてのアイデンティティや価値観を捨てたのではなく、同化をすすめつつ日本人として生きるよう

になったことが、彼らの作品から読み取ることができた。彼らはアメリカ人であるとともに日本人という意識を保持し、二重の帰属性を持ち続けたのである。

一世の残した短歌、俳句、川柳によって、かれらの戦前から戦後に至る日本人としての思考、行動、感情の一端を知ることができた。彼らの文芸作品が、他で得ることのできない社会史、文化史の史料であることが証明されたといえよう。

#### 注

1 島田法子『戦争と移民の社会史——ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争』（現代史料出版、2004）、51頁。

2 使用した短歌、俳句、川柳の出典は以下である。潮音詩社『歌集 ラウハラ』（ホノルル、潮音詩社、1959）；『鑽』第2号（ホノルル、鑽社、1947年4月）；岩谷残花『歌集 沈黙の塔』尾崎無音編（ホノルル、尾崎無音、1954）；竹井蘇人『監禁歌集 荒野』（1946年4月、白雲堂、ホノルル）；相賀安太郎『淫芳歌集』相賀誠編（ホノルル、相賀誠、1957年）；中林無有『心影集』（大阪、生光社、1964）；山里慈海『居士は春風』（ホノルル、慈光園、1950）；横山松青『アイカネ』（ホノルル、青夏吟社、1960）；古屋翠溪『流転』（鎌倉、層雲社、1958）；川本恵子『紫雲華』（東京、ゆく春発行所、1983）；川柳ウイロー社編『米布川柳句集 やなぎ行李』（ホノルル、築山快夢起、1952）；マウイ川柳吟社編『しほ風』ガリ版刷り（マウイ島、マウイ川柳吟社、1956）；『ハワイタイムズ』1946年1月1日から8月14日の文芸欄。

3 Honolulu Star-Bulletin, May 1, 1953.

4 ハワイ日本人移民史刊行委員会編『ハワイ日本人移民史』（ホノルル：布哇日系人連合協会、1964）、250頁。

5 『布哇報知』1941年12月5日。

6 Conn Stetson, Rose C. Engelman and Byron Fairchild, *Guarding the United States and Its Outposts* (Washington, D.C.: Office of the Chief of Military History, Department of the Army, 1964), p. 201.

7 Tessa Munekiyo, “Buddhism: World War II’s Forbidden Religion,” Hawaii History Day Research Paper, 1996, University of Hawaii at Manoa, p. 3.

8 松浦玉英師インタビュー、著者による、パールシティにて、1998年9月11日。

9 Ruth M. Tabra, *A Grateful Past, a Promising Future* (Honolulu: Hompa Hongwanji Mission of Hawaii, 1989), p. 84.

10 *Personal Justice Denied: Report of the Commission on Wartime Relocation and Internment of Civilians* (Seattle: University of Washington Press, 1997), p. 265.

11 War Research Laboratory, “Staff Meeting Notes,” Oct. 6, 1945. RASRL

B19F12. University of Hawaii at Manoa Archives.

12 Franklin Odo, *No Sword to Bury: Japanese Americans in Hawaii during World War II* (Philadelphia: Temple University Press, 2004), pp. 253–9.

13 ハワイ日本人移民史刊行委員会編『ハワイ日本人移民史』、353頁。